

1990-1995 年雲仙普賢岳噴火

1990 年（平成 2 年）年 11 月、雲仙普賢岳^{うん ぜん ふ げん だけ}は 198 年ぶりに噴火を開始し、1991 年の春には盛んに火山灰と火山ガスを噴出するようになりました。これにより水無川^{みず なし かわ}上流部は荒廃し、5 月 15 日には最初の土石流^{ど せき りゅう}が発生し、5 月 20 日には頂上付近^{じ ごく あと か こう}の地獄跡火口に溶岩ドームの出現が確認されました。溶岩ドームは、溶岩の供給で盛り上がっていき、やがて崩落を開始、5 月 24 日には崩落した岩塊^{がん かい}とガスが混ざった高温^かの火砕流^{か さい りゅう}が斜面を流れ下るようすが確認されました。6 月 3 日夕刻、大規模な火砕流が発生し、死者・行方不明者 43 名を出す大惨事となりました。溶岩ドームの崩落跡には新たな溶岩ドームが生成され、6 月 8 日も崩壊し、これに伴う大規模な火砕流が発生しました。たび重なる火砕流により、山腹に大量の火砕流堆積物^{か さい りゅう たい せき}が積もったため、大雨のたびに大規模な土石流が発生しました。

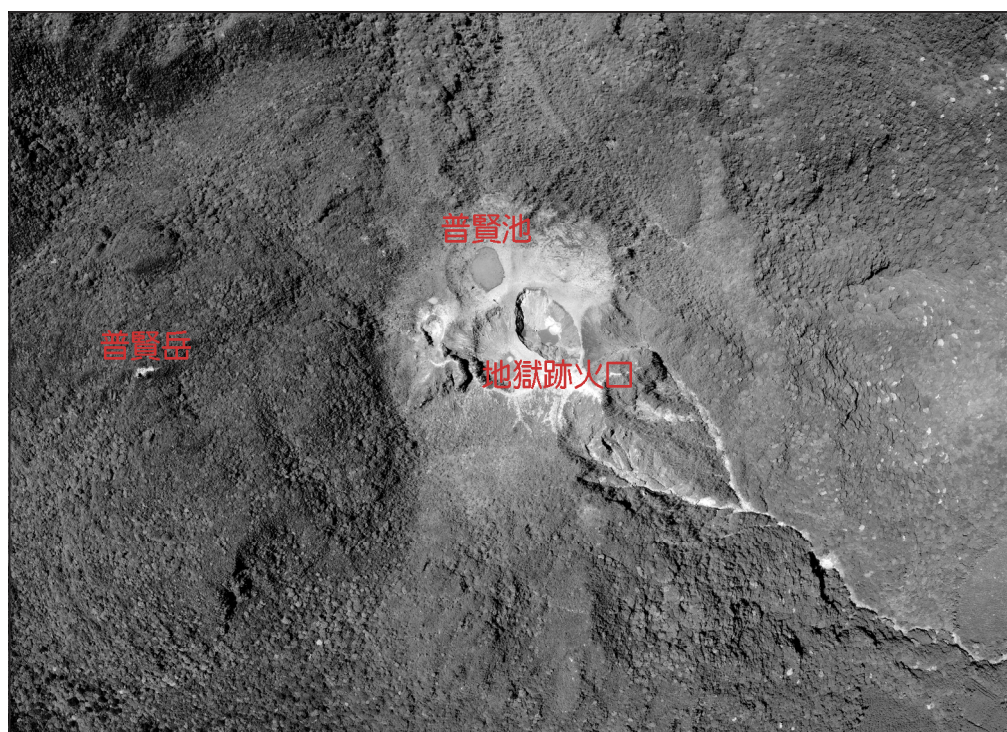
雲仙普賢岳はその後も火砕流と土石流が頻発し、危険地域に住居を構えていた住民の避難生活は長期にわたりました。さらに、降灰によるたばこや茶など農作物への被害、観光産業への影響も非常に大きいものでした。

1994 年になってようやく沈静化のきざしが見えるようになり、1995 年 5 月 25 日には火山噴火予知連絡会が溶岩噴出の停止を発表、事実上の終息宣言となりました。

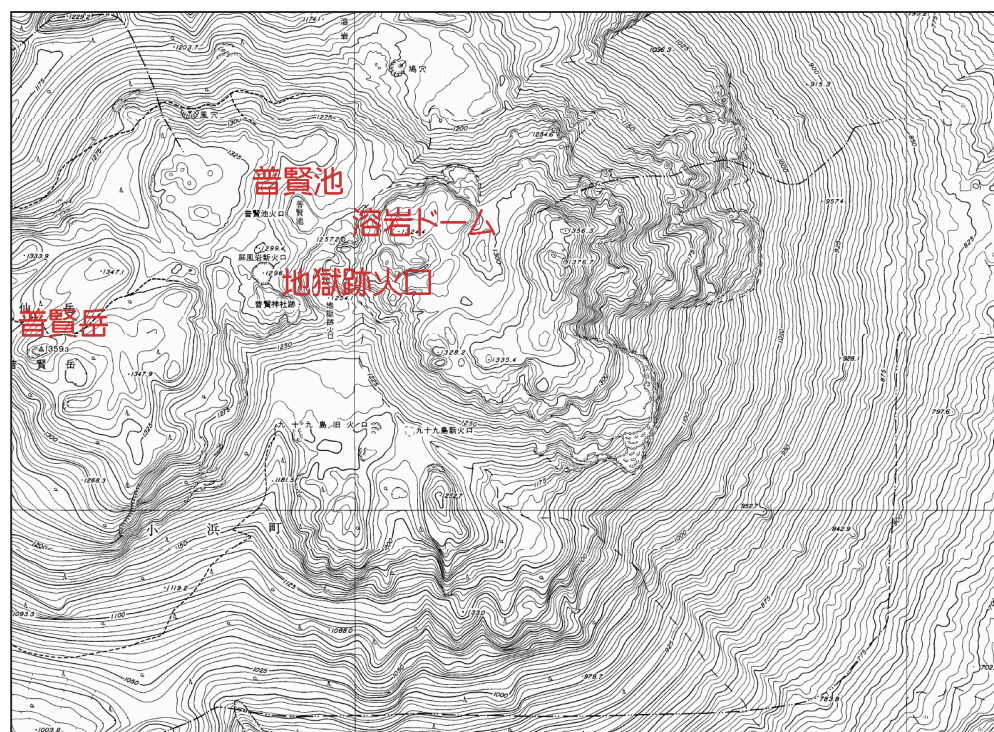
約 5 年間に及ぶ噴火活動で、溶岩ドーム出現以降の総溶岩噴出量は、約 2 億立方メートルと推計（1995 年 国土地理院）。東京ドーム 160 杯分以上に相当する膨大な量です。



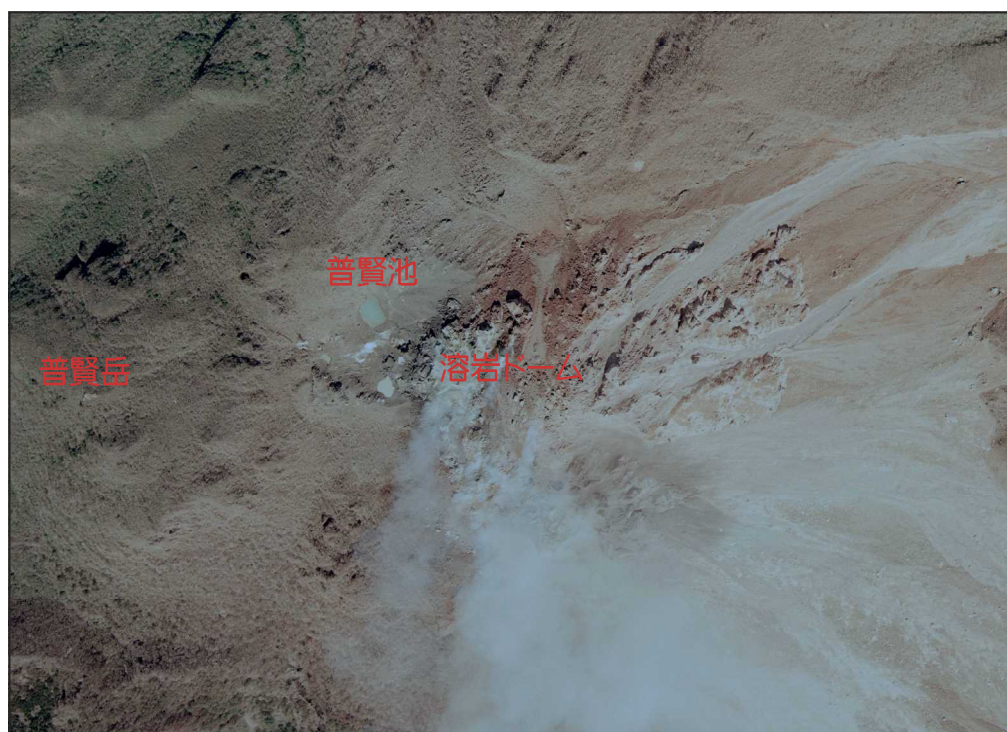
1991 年（平成 3 年）6 月 8 日の火砕流



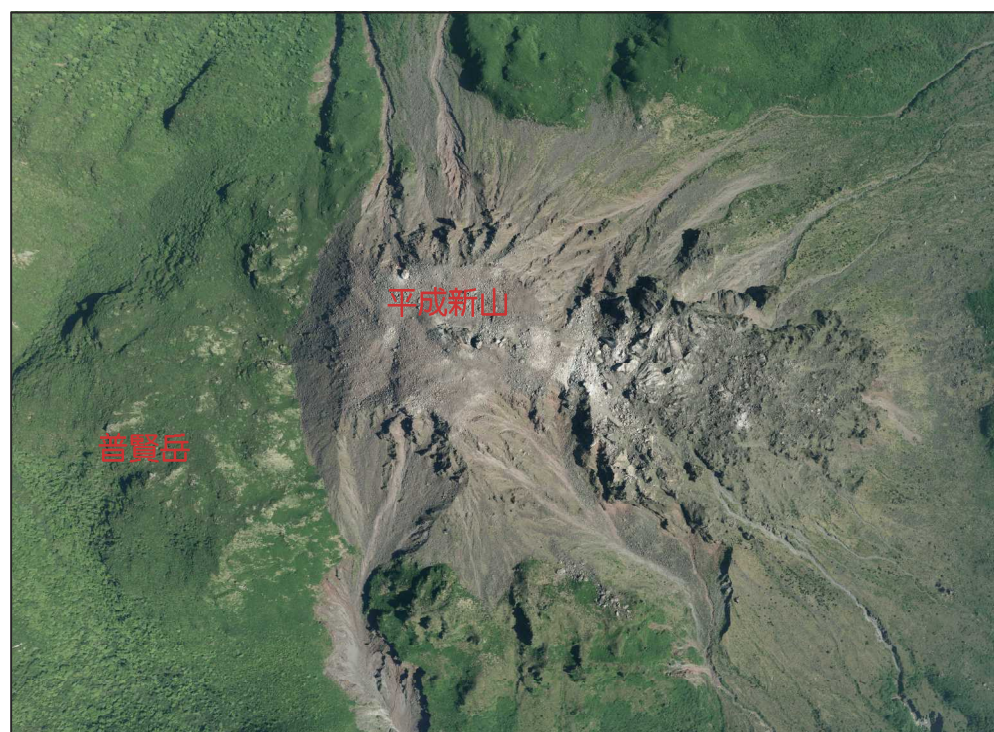
溶岩ドーム出現直前の雲仙岳山頂付近（1991 年 5 月 18 日撮影）



5 千分 1 火山基本図（1992 年修正）

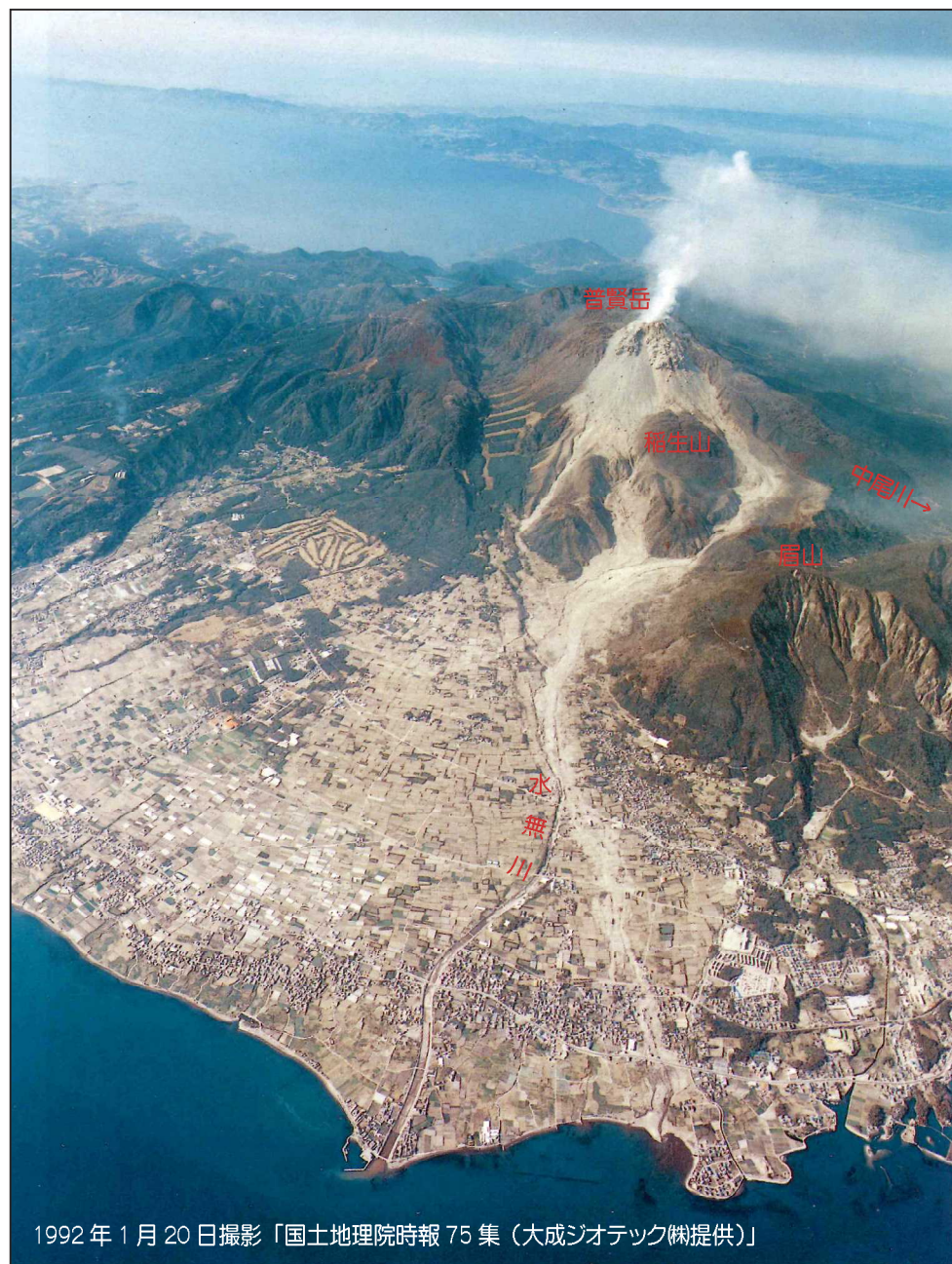
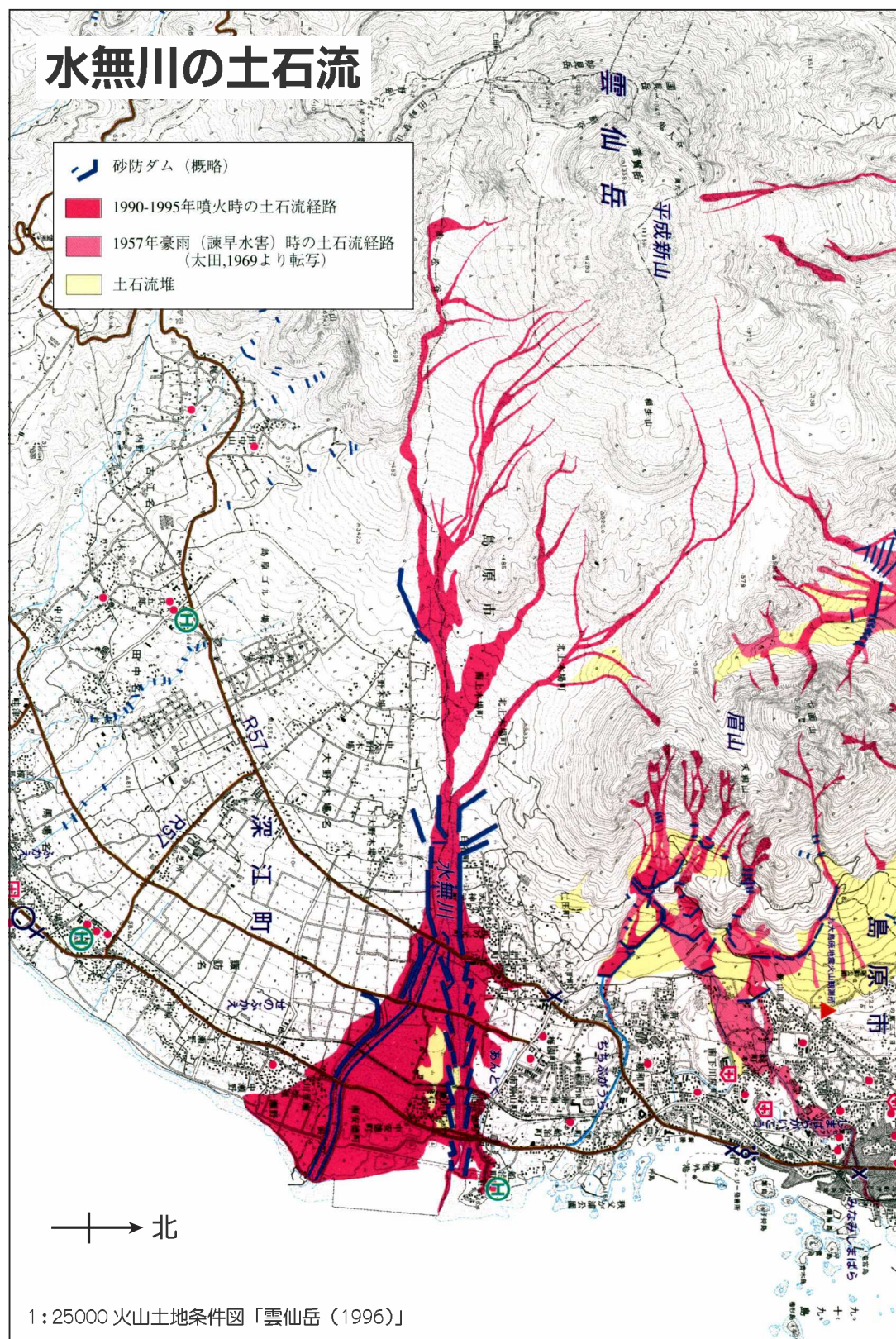


噴煙を上げる溶岩ドーム周辺（1992 年 4 月 25 日撮影）



現在の雲仙岳山頂付近（2015 年 5 月 1 日撮影）

うん ぜん だけ みず なし がわ なか お がわ か さい ぶつ ど せき りゅう
雲仙岳の山腹や水無川、中尾川などの谷筋には大量の火砕物が堆積しているため大雨による土石流発生の危険があり、各河川の流域には砂防堰堤や導流堤が建設されています。とくに国道や鉄道が寸断されるなどの被害が出た水無川では、大規模な土石流が発生した場合、土石流を直接海に流すための大規模な導流堤が築かれました。火山活動の続く警戒区域内での除石工事には、ブルドーザーやダンプトラックなどを遠隔操縦する無人化工法が世界に先駆けて用いられました。



この写真を見ると、大規模な土石流が、水無川の河道を途中から離れて、海に向かって直線的に流れ下っていることがわかります。また、稲生山の北側に向かった土石流は眉山に遮られ、島原市街地に向かわずに水無川の方に迂回している様子もわかります。

水無川の砂防堰堤・導流堤群



災害を語り継ぐ



土石流被災家屋保存公園
（火山災害体験学習施設）

普賢岳 1359m

雲仙岳

平成新山 1483m



普賢岳と平成新山

2002 年撮影

雲仙^{うん ぜん だけ}岳^{しま ばら はん とう}は島原半島中央部にある火山群の総称で、それぞれ形成時期の異なる溶岩ドーム群からなる複成^{ふく せい か ざん}火山です。主峰^{ふ げん だけ}の普賢岳は有史以来噴火を繰り返しています。1990 年から始まった噴火で形成された溶岩ドームは「平成新山^{へい せい しん ざん}」と名付けられました。

雲仙とその周辺は、1934 年（昭和 9 年）に瀬戸内^{せ と うち}地域及び霧島^{きり しま}地域とともに日本で最初の国立公園に指定され、火山景観として有名な“雲仙地獄^{うん ぜん じ ごく}”や温泉・湧水、ミヤマキリシマの群落、島原城^{しま ばら じょう}や武家屋敷、キリシタンにまつわる歴史遺産などがあり、多くの観光客が訪れています。

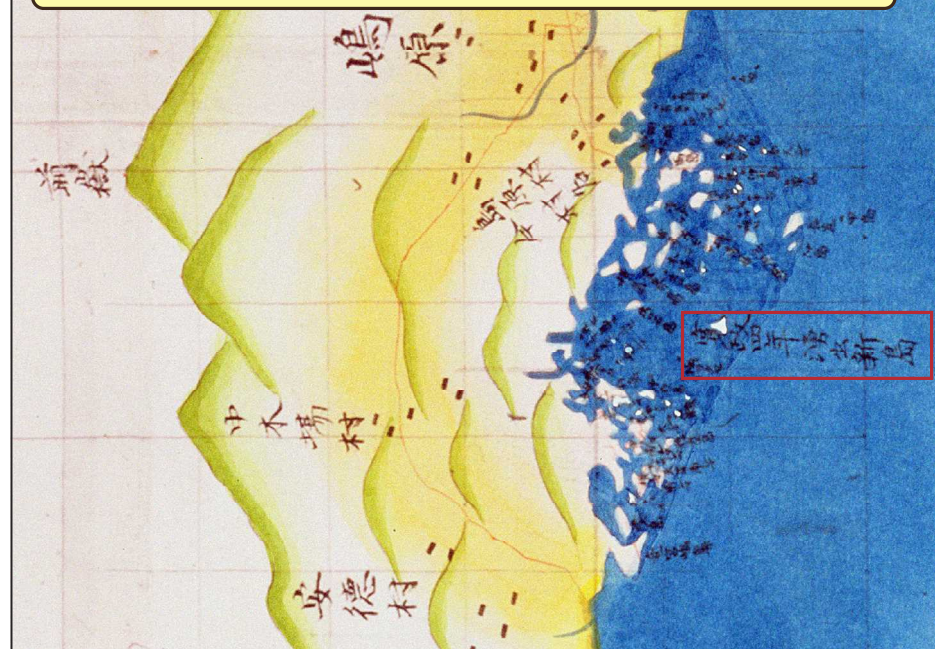
■1792 年（寛政 4 年）「島原大変肥後迷惑」

1792 年^{かん せい}（寛政 4 年）の年明け早々、普賢岳の山頂付近から噴火が始まり、溶岩^{しん やけよう がん}（新焼溶岩）が噴出しました。溶岩は中尾川^{なか お がわ}上流の大月谷^{おお つきだに}を約 3km にわたり流れ下りました。約 50 日間の噴火活動後の旧暦 4 月 1 日（現在の 5 月 21 日）、強い地震とともに眉山^{まゆ やま}（当時は前山^{まえ やま}）の東面が大崩壊し、大量の岩屑^{がん せつ}が有明海^{あり あけ かい}になだれ込みました。これにより大津波が発生し、被害は有明海沿岸のほぼ全域におよび、死者 1 万 5 千人に達する有史以来の日本最大の火山災害となりました。

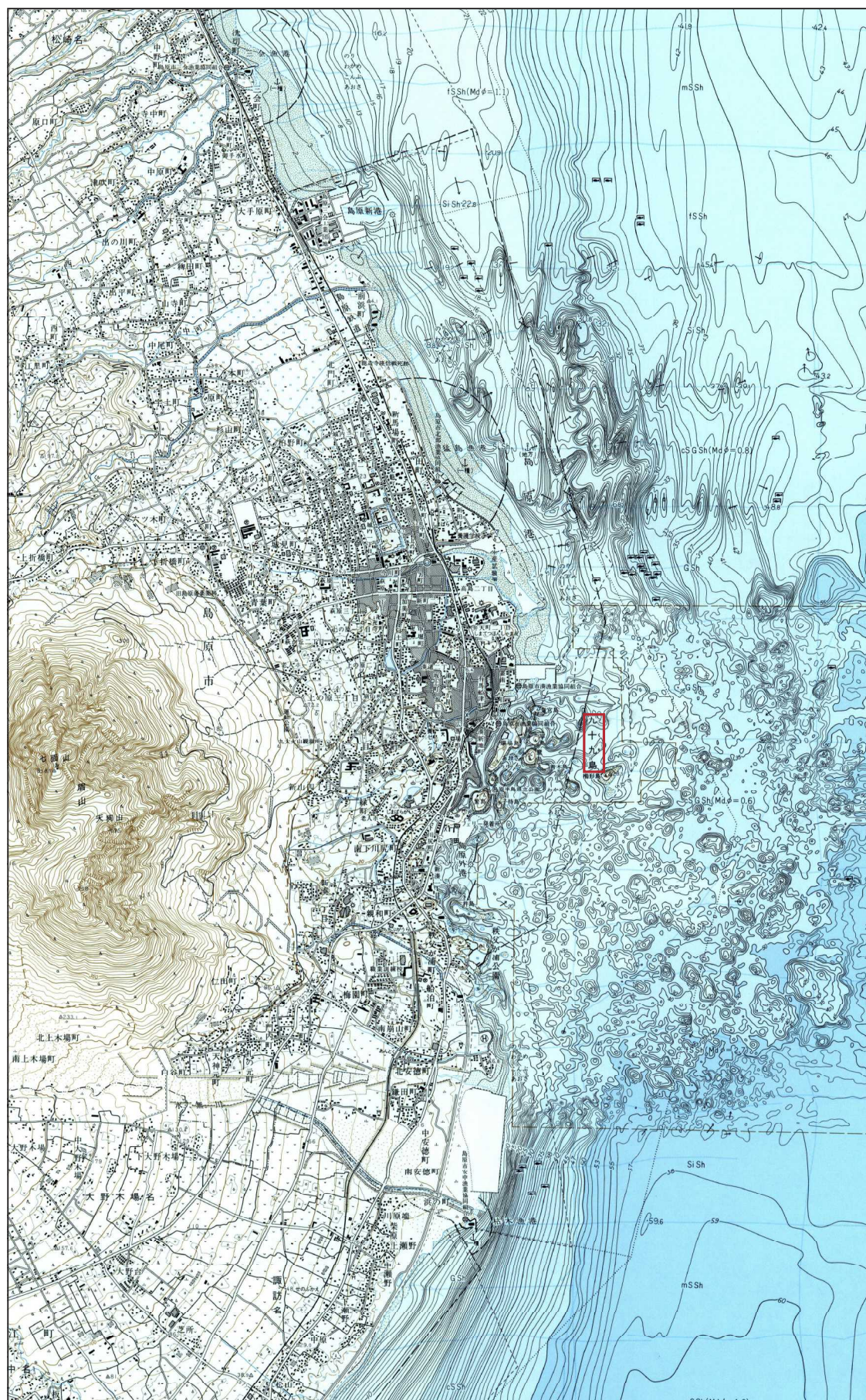
対岸の熊本県^{ひ このくに}（当時の肥後国）でも被害が甚大で「島原大変肥後迷惑」と伝承されています。

この噴火と眉山の山体崩壊で生じた多数の丘（島々）を「流れ山^{なが やま}」といい、有明海ではその痕跡^{こん せき}を見ることができます。「流れ山」がたくさんの丘（島）をつくったことから九十九島と呼ばれています。

伊能図^{いのう ず}では、「流れ山」は「寛政 4 年湧出新島」と表示されています。描かれた島の数はいくらも多く、この間に波浪などの侵食や浚渫^{しゅん せつ}等により島が消失したことがわかります。



伊能大図【肥後天草 肥前島原】（部分）



1:25000 沿岸海底地形図「島原」（1998）